

II 開園と植付け

[見出し]

1. 園地の選定（適地） . . . [1]
 - (1) 気象条件
 - (2) 土壌条件
 - (3) 市場条件 . . . [2]
2. 開園
3. 植付け
 - (1) 苗木の選択
 - (2) 植付け時期
 - (3) 植付け距離
 - (4) 植付け方法 . . . [3]
 - (5) 植付け後の管理
4. 改植 . . . [4]
 - (1) いや地
 - (2) 改植時の注意点

II 開園と植付け

1. 園地の選定（適地）

(1) 気象条件

イチジクは、原産地が亜熱帯地方であるから、栽培地域は夏の高温よりも冬の低温によって制限される。耐寒性は品種によって異なるが落葉果樹のなかでは弱いほうに属す。耐寒性の強い蓬＝柿の経済栽培の北限は新潟、福島、宮城を結ぶ地域とみなされる。榊井ドーフィン耐寒性が弱く、成木で $-8\sim-12^{\circ}\text{C}$ が限界といわれ、幼木はとくに弱い。しかし、凍寒害の発生状況をみると、西日本では冬の低温よりむしろ春先の低温によるものが多く、発芽期前の耐寒性は $-1\sim-3^{\circ}\text{C}$ ていどと思われる。したがって事前に局地気象の調査をして栽培の可否を判断する。

雨量については、本来が夏乾帯の果樹であるから、夏半期の降水量が少ないことが望ましい。わが国のように夏期高温多湿の地域では枝葉が過繁茂となりやすいが、栽培を左右することはない。しかし、成熟期の降雨は果実の裂開、酸敗を生じさせるとともに、日照不足による着色不良果を生じ、収量や品質の低下をまねく。また、疫病や黒かび病などが発生しやすい。

イチジクは風に弱い。比較的浅根のばあいが多く、強風や台風で倒木したり、枝の裂傷が生じたりしやすい。また、葉は大きく肉質で粗毛を有するため、強風で葉がゆれる

と果実に傷をつけて外観、品質を低下させる。開園にさいしては風当たりの少ない場所を選び、防風対策も必要である。

(2) 土壌条件

イチジクは比較的土壌を選ばず、各種の土壌でよく生育するが、土層の深い砂壤土～壤土がよい（第1表）。土壌酸度は、酸性土壌には不適で中性にちかいアルカリ性土壌に適するといわれ、果樹のなかでは石灰の吸収量が多いほうに属している。

土壌条件でとくに問題となるのは土壌水分である。イチジクは果樹のなかではモモとともに、根の酸素要求量が高く、耐水性が弱い（第2表）。従来わが国ではイチジクは湿地に適する果樹と一般に信じられていたが、これは誤りである。一方、イチジクは葉が大きく、夏の高温乾燥期には葉面からの水分蒸散量が多く、水分要求量が多い。そのため、土壌水分が不足すると枝梢の生長が悪くなったり、早期落葉を生じたりして収量や品質の低下、日焼け障害の発生、樹勢の低下をまねく。

以上のことから、開園にあたっては排水がよく、保水性があり、土層の深い土壌で、灌水に便利な圃場を選ぶことが最も大切である。

さらに、イチジクはセンチュウが寄生しやすく、いや地現象も著しいので、センチュウがいない圃場を選び、連作はしない。

(3) 市場条件

わが国ではイチジクは主に第2期果（秋果）が生産され、生食に利用される。果実は熟度による品質差が著しく、完熟したイチジクは特有の風味がありたいそうおいしいが、未熟な果実は甘味が少なく、風味がなくてまずい。また、果実は鮮度の低下が速やかで日持ち性が乏しく、果皮が薄く、果肉が軟らかいため輸送性が劣る。そのため、ほとんど完熟するまで樹上におき、出荷当日の早朝、または前日の夕方に収穫し、その日のうちに消費者の口に入れることが望ましい。したがって、市場出荷を対象とした経済栽培の成立には消費地に近いことが重要で、気象や土壌など自然条件に特別致命的な欠陥がないかぎり、市場への距離が近いという条件だけで産地になりうる。

2. 開園

イチジク園の開園にあたっては、前項で述べたように耐水性が弱く水分要求量も多いために、排水の悪い土壌ではまず暗渠排水を設置するなどして根が深く入りうる条件を与えるとともに、灌水施設を設ける。また果実がきわめて軟らかいので、収穫、運搬にさいしては取扱いに充分注意するのはもちろん、園内道や園から選果場までの道路などは振動で果実をいためないよう整備しておくことが望ましい。

さらに、畑地、樹園地、桑園などの既耕地に開園するばあいは、土壌センチュウはもちろん紋羽病やアブラナ科作物の菌核病などにも注意する。

開園は、石灰または苦土石灰など土壌改良資材を10a当たり200kgていどと堆肥を全面に施用して深耕、砕土、整地を行ない、植え穴を掘って苗木を植え付ける。なお、水田転作のばあいの開園法については別項で述べる。

3. 植付け

(1) 苗木の選択

苗木の選択にあたっては、品種が正しいこと、地上部がよく伸び充実していること、病害虫におかされていないこと、根がよく発達していることなどに注意する。とくに、ネコブセンチュウのついた苗木は1本も栽植してはならない。

(2) 植付け時期

苗木の植付けは秋植え、春植えいずれでもよい。他の果樹よりも新根の発生時期はややおそいため、春植えの悪影響は少ない。したがって、寒地では冬期の凍寒害や乾燥害を防ぐために3月上中旬植えが安全であり、暖地では落葉直後の秋植えが翌年の生長がよく望ましい。

(3) 植付け距離

イチジクはクワ科の半喬木性落葉果樹で、土壤条件がよければ樹冠はかなり大きくなり経済樹齢も長い。植付け距離は品種や土質、土壤の深さ、排水の良否など土壤条件および整枝法で異なる。

畑地では10a当たり20～30本植え（5.5～7m間隔）を基準にして、土壤条件によって増減するが、樹勢の強い蓬＝柿は少なく、樹勢が中程度の柵井ドーフィンが多く植え付ける。

イチジクは結果樹齢に達するのが早く、植付け後2～3年目から収穫が得られる。しかし、植付け本数が少ないと幼木期の収量が少ないので、基準の2倍以上の密植とし、幼木期から少しでも収量をあげるほうが経営上有利である。ただし、このばあいには樹の生育に応じて縮伐や間伐を断行する必要がある。密植状態を維持すると、結果部が上昇して収穫作業の能率が低下し、また園内の通風や採光が悪くなり疫病や黒かび病の発生、着色不良果の発生で収量や品質が低下する。

なお、水田転換園の植付け距離については別項で述べる。

(4) 植付け方法

植付けは他の果樹と同様、小高く、浅くが原則である。畑地のばあいは、植え穴の排水を考慮したうえで第1図の要領で植え付ける。水田転換園では、植え穴は深さ30cmでいど、大きさは根が充分はいるていどでよい。

植付けまでに根が乾燥しないよう注意し、根は掘上げのさいに傷ついた部分をかき取り返す。植付けは根をよくひろげ、化成肥料300gていどを根から少し離して輪状に施用して土とよく混ぜ、覆土し、足で軽く踏み固める。

植付け後の苗木の切返し（主幹）の高さは、苗木の良否や整枝法で異なるが、ふつう50cm前後で切り、丈夫な支柱を立て、これに幹を結束する。

(5) 植付け後の管理

植付け後は、敷わらか黒のポリマルチをして土壤の乾燥を防ぎ、適宜灌水と除草を行なう。切り返した主幹からは数本の新梢が発生するが、主枝にする以外の新梢は早期に芽かきをして取り除く。主枝として残す新梢は、主枝と主枝の間隔を15～25cmていど離して車枝とならないように注意するとともに、伸ばす方向にも留意して枝が重ならないよう配置する。主枝には添え竹を立てて誘引し、枝の下垂を防ぎ伸長を促す。

新梢の伸長状況によっては追肥を行なうが、7月下旬～8月上旬には伸長が停止してい

ることが望ましい。おそ伸びや秋伸びしたり，副梢が発生したりする状態では枝の充実が悪く，冬の凍寒害を受けやすい。

4. 改植

(1) いや地

イチジクはいや地現象が著しく，イチジクの跡地に再びイチジクを植えると，新梢の伸長や根の発達が悪く，葉は小さくて薄く，早期落葉するなど樹の生育が著しく阻害される（第3，4表）。イチジクの枝，葉，根には水溶性のある種の有害物質が存在し，イチジクの生育や作物，雑草の種子の発芽と生育を抑制することが知られている。イチジク園では剪定枝や落葉は園外に持ち去られるので，ふつうは根だけが残る。

したがって，いや地の原因としては次のふたつが考えられている。すなわち，イチジクの古い根の分解によって生じるある種の有害物質が影響を及ぼすことと，ネコブセンチュウなどの土壌センチュウ類が次代の根に寄生して生育を抑制することである。このため，開園，改植にあたっては，このいや地現象に充分注意を払わなければならない。

(2) 改植時の注意点

イチジクはいや地現象があるので連作しないことが望ましい。やむをえず改植や連作するときは，古い根を完全に除去し，土壌消毒をして土壌センチュウを防除し，新しい土を客土するなどの対策が必要である。なお，水田転換園では古い根を除去してイネを1～2年栽培すればセンチュウが防除でき，再びイチジクの栽植が可能となる。